

# 多文化社会と教育支援Ⅱ ー現状と課題ー

企画者：佐野秀樹	(東京学芸大学)
司会者：佐野秀樹	(東京学芸大学)
話題提供者：具 英姫	(お茶の水女子大学大学院)
ブリンチムツグ	(一般社団法人 STEP : Save The Earth Project)
韓 燕	(墨田区国際学習センター)
李 原翔	(東京学芸大学大学院)
指定討論者：鈴木一代	(埼玉学園大学)
佐野秀樹	(東京学芸大学)

## 【企画の趣旨】

多くの外国人が居住するようになった日本では、外国人や国際結婚の子どもたちが、持っている豊かな文化的背景を十分に活用できるような教育が必要である。一見、外国人の子どもたちは、日本語が十分でないため、能力が不足しているように見えるが、実は外国人の子どもの中にきわめて高い能力を持っている者もいる。外国人の子どもに十分な資源を使って教育を与え続けられれば、日本の社会を発展させる十分な才能を育てることができる。と考える。

このシンポジウムでは、日本で外国人に対する教育支援についての研究や実践に携わっている新進気鋭のスピーカーに中国、韓国、モンゴルなどの子どもたちの教育支援について語ってもらうことにした。

## 【話題提供】

### 韓国人親の教育への思いと子どもの進路

具 英姫 (お茶の水女子大学大学院)

ここ10年の間、東京新宿の新大久保駅周辺は外国人人口が急増し、定住化が進んでいる。中でも韓国人の増加は著しく、保育園や小学校を始めとする公教育機関に在籍する韓国人児童の数はかなりの割合を占めている。在日外国人子育ての支援においては、出身国によって、外国人人口の割合によって、区市町村に求められるニーズも異なり、各地域の必要に応じて具合的な子育て支援策が必要である。

子どもの教育問題がニューカマー韓国人にとって目下の関心事項である。彼らの教育に対する興味関心は非常に強く、韓国人特有の教育観のもとで世界が驚くほどの熱意や競争の姿を見せている。一昔前、

英才教育の一部としてなされていた英語教育や数々の習い事は、今では一般的な教育の一部に過ぎない。小中学生の早期留学でヒートアップしている韓国内の情勢に影響され、日本に住む韓国人親の教育熱は、韓国学校およびインターナショナルスクールでも見られる。また、子どもたちへの過度な期待や思いで親子の間では、進学や進路をめぐる葛藤が生じる事も多い。ニューカマー韓国人生徒への相談支援から見えてくる教育支援のあり方について検討したい。

### 異国での子育てにおける言葉の壁と文化変容

ブリンチムツグ (一般社団法人 STEP)

異文化環境での子育てにおいて、言葉をはじめ、文化アイデンティティの確立や文化変容も大きな課題である。異国での暮らしの中で、何よりも先に言葉の壁にぶつかる。特に日本語の表現には、敬語のように、相手との関係によって異なる表現の仕方もあり、外国人にとって難しいものである。こうした発想のない国からきた外国人にとって、日本語を習得するには、日本の文化を理解することが前提となっている。一方、異文化接触において、人々は、しばしば体にしみ込んでいる自文化を参照に相手の言動を評価しがちである。文化間に摩擦や衝突が生じたり、相手の価値観や振る舞いに違和感を覚えたりした際、たとえ個人レベルの問題であっても、民族間や国民性として見なされることが多い。このような考え方は、異文化環境に挟まれている親子にとって、異文化環境はマイナスの意味合いが強い。実際異文化適応研究において、しばしば取り上げられているのも、不適応の問題と適応困難である。しかし、異文化環境で生活している親子は、自然に異文化や多言語に触れる機会が多く、多様性や異質的なもの

に積極的に関わろうとする傾向がある。

日本社会が、異文化や多言語にもっと受容的になれば、日本で生活している外国人親子は、より日本社会に親近感を持ち、多文化体験をプラス的にとるようになるであろう。

### 在日外国人児童生徒の学習不適應問題および教育支援における留学生の役割

韓 燕 (墨田区国際学習センター)

日本語指導員、そして授業通訳として外国人児童生徒の学習支援活動に携わるようになって、6年間が経った。日本語のハンディキャップと教科学習の困難が、多くの子ども的高校進学のを阻んでいる現実は依然として変わっていない。教育支援政策の整備は急務であるが、現在行われている教育支援の効果を検証し、教育支援のあり方を改めて検討する必要もある。

中国から来日した子どもの学習支援に関わっている中で、一部の子どもの学習不適應問題は、日本語学習問題以前に、基本的な学習習慣と論理的思考能力の欠如などが原因であることに気付いた。特に基礎学力が不十分で、母国でもよい学習習慣が身につけていない子どもたちは、来日によって学習習慣の形成がますます難しくなり、教科学習の連続性も中断されてしまう。現在、来日したばかりの外国人子どもに対して初期日本語指導が行われているが、教科学習を理解するまでの日本語レベルに達するまでに、かなり時間が必要である。この間には、子どもたちが全く理解できない日本語で授業を受けなければならない。このため、精神的に不安定になり、ますます勉強嫌いになってしまうような学習不適應子どもが増えるのではないかと推測できる。

この問題を解決するために、理解可能な言語による支援補助が必要である。ここで外国人子どもの教育支援のリソースとして留学生の活用を提案したい。留学生は、第二言語習得の経験があり、自身も異文化適応の経験者でもある。留学生の存在は、子どもたちに安心感を与えるだけでなく、人生のモデルとして、子どもたちの学習モチベーションの向上にも一助になる。教科学習について留学生はあくまでも補助的な存在であるが、母語を媒介することで、子どもたちの学習理解を促進し、異文化適応能力の向上にも役に立つ。一方、留学生の在日外国人子どもの教育支援への関わりは、彼らの社会参加意欲やグ

ローバル化における多文化共生問題への関心につながるのではないかと期待できる。

外国人子どもへの支援活動の質の向上とサポートリソースとしての留学生の活用における子どもと留学生の間に潜んでいる可能性について、皆様と一緒に考えていきたい。

### 親の呼び寄せで来日する児童生徒の実態および支援課題について

李 原翔 (東京学芸大学)

近年、親の呼び寄せで来日する中国(系)子どもが増えつつある。子どもたちの来日事情や来日時期が多様であるため、受け手の教育現場ではさまざまな困難を抱えている。特に、呼び寄せで来日する子どもの多くは、母親が日本人との国際結婚による再婚のケースである。親子が日中両国間で離れて暮らしていた期間は、平均で4、5年間、長い場合は10年以上を及ぶケースも珍しくない。そのため、親子と言えども、互いに相手の生活習慣や考え方も受け入れ難いものがある。

多くの親は、母国での子どもの状況を理解していない上に、日本に居ながら日本の教育事情も理解していない。子どもの来日年齢と母国での教育歴によっては、日本の学校に編入できないこともあり、たとえ編入できていても、情報不足や親と学校側との意思疎通の欠如などが原因で、十分な日本語指導や教育支援を受けられない子どもも大勢いる。十代で来日する子どもたちにとって、思春期の発達課題は、アイデンティティのほかに、文化的アイデンティティ、異文化環境での親子関係と学校適応も課せられている。適応課題は多いが、建設的な人間関係や有能感・達成感を多く体験すれば、子どもたちが自己評価を高め、自ら異文化環境に適応していこうとする意欲も高まるだろう。

呼び寄せで来日する子どもの多くは、定住や永住の資格、また日本の国籍をもっている。こうした子どもたちへの教育支援は、子どもたち自身のためだけでなく、日本社会にとっても重要な課題である。現在、日本の高校に進学していない外国人生徒は、年間およそ一万人ずつ増加している。このことが日本社会にとってどういうことを意味するかを考えることは急務といえる。